

【『琅』・あとがき】 書くことこそよけれ、花と実が成るペンの力

またまた私事にわたって恐縮である。

一九九二年、当時、勤務していた大学で、学長を含む集団から謂れ無き誹謗・中傷を浴びせられ、私は大いに傷ついた。『琅』を興したのは同年10月、もちろん己を癒やして立ち直るため。以後四半世紀、これを支えに生きてきた。もしこの『琅』なくば、私の人生は恐らく見るも無残に崩れ去っていたに違いない。

私は、醜悪なる人たちに向かう尋常ならざる怒りと恨みを物書き活動の活力源としながら、初め、思い出の歌つづげに、珠玉の如き愛と誠を捧げてくれた善美なる人たちとの関わりを綴っては傷められた心を癒やし、『歌は心の帰る船』、次いで、醜悪を懲らしめるため敢えてそれ（醜悪）を投影する社会の不条理を様々取り上げ、は旭上に載せて切り刻み、怒りと怨みを昇華してきた（『二言、三言、世迷い言』）。喜怒哀楽の有様が、自分でも分かるほどに包容してくる。生きる意欲が旺盛になり、つれて諸々思惑は溶けて霧散し、今では、書くという行いだけが、自己表現や自己実現の恰好の手段として残され、いつかライフワークの一里塚。カラー・ピラミッド・テスト入門（二〇二年）も成し遂げていた。有難きかな。まさに、書くことこそよけれ、読まれることまたよけれである。

そして私には、もう一つ、私を支えて止まぬ仕事があった。ただか50坪程の我が家の庭、それを精一杯拓いての果樹栽培である。『琅』の流れと併行し、周囲が驚くほど本格化していった。5月のビワから始まり、旬の時期が次々異なるサクランボ、ブルーベリー、桃、梨、ブドウ、柿、リンゴ、キウイ、ミカン（9・3月）と揃い、今では日本の代表果実がほぼ何でもありの「彩光果樹園」（牛村圭氏命名）である。この果樹林の中で、ひととき異彩を放つのが、ラ・フランスに長十郎・王秋・愛宕・清麻呂と梨の4種を接ぎ、さらに津軽・王林・ふじのリンゴ3種を混ぜた8種「梨りん」の小樹である。数はそれぞれ僅かではあるが、7・10月、旬を追って次々実る、多彩な色と形とその味わい。それを賞味するたび、嗚呼、多種

多様な読み物こそ楽し、『琅』もかくあれば、送って迷惑がられず、万一喜ばれるかもしれぬ、と淡い思いに胸がときめく。

とは言え昨今、さすがに老いを自覚する。お便りへの返信忘れは日常化し、物忘れ、記憶違いもまた同じ。友人・知人にお悔やみ申し上げることをすっかり失念したことさえある。過日、妻の祝いの誕生日を忘却し、数日経って妻から言われて気がついた。眼精疲労と視力の衰え、そして認知の衰え、体力の衰え。気力はあれども、すでに限界。『琅』編集、割り付けのお役目、一世代年少、創刊以来の若き盟友、松村茂治氏に移行する時来ると思料する。印刷所に持ち込むデジタル完成版下原稿の作成は容易ならざる作業。原稿締め切り厳守、迅速なる校正等々、皆様、ご協力を。（宗内 敦）

#### 【評壇・執筆者紹介】

・牛村 圭 国際日本文化研究センター教授。専攻は比較文学・比較文化。著書『文明の裁き』をこえて 対日戦犯裁判読解の試み（中央公論新社 中公叢書、二〇〇一年・第10回山本七平賞を受賞）。『戦争責任』論の真実（『ユフ研究所』、『東京裁判を正しく読む』（共著、文春新書）ほか。

#### 訃報

・同人 伊藤 孝氏 10月9日逝去。享年67。本誌『琅』に25号から参加。病苦と戦いながら、真摯に社会正義と人間愛を追求する創作活動を続けた。遺体は、「最後まで地域医療に貢献したい」の遺言に従い、岩手県立病院に献体された。まさに求めて容易には得られぬお方であった。哀悼。

『琅』二九号 二〇一五年十月発行  
編集・発行 宗内 敦、松村 茂治  
発行所 193 〇八二 東京都八王子市川町二二八・二〇二  
「琅の会」・（〇四二六五二・二二二七）  
印刷所 株式会社ポブルス